

The *Ancrene Wisse*, 第四章, Temptation — ‘Uttre temptatiun’: 説教の語り口, 修辞法, 構成法等に言及した試論 (続篇)

貝 原 洋 二

The *Ancrene Wisse* 4. Temptation — ‘Uttre temptatiun’: An Essay on Speech,
Rhetoric and Composition of his Preaching (Sequel)

Yoji KAIHARA

This present paper is written with the same purpose and method of research as those which are already shown in Journal of Kinki Welfare University vol.1 December 2000. The essay is divided into the early part, which includes 94 : 20-97 : 5, and the latter one, which does 97 : 6-99 : 18 of the text. The point that the author (or preacher) intends to preach says that everyone who lives in this world and suffers from the temptations from the man's evils are lucky and happy because of the fact that they will be loved and receive divine protections by God. The author's manner of speech depends chiefly on the metaphorical or allegorical expression about which this paper aims to analyze and clear within the scope of his language expressions.

Key words : Temptation, Salvation, Suffering, Ordinance

誘惑, 救済, 忍耐, 神意

1.

今回書いた小論は前回書いた小論の続きとして論考されている。前回の小論は全部『近畿福祉大学紀要』第1巻, 第1号の31頁から40頁に亘って載せられた。今回の小論は前回のその続篇の形で書かれている。研究目的, 方法, 論述の仕方は殆ど同じである。従って筆者が何んな目的で, 意図を以って本論文を書いたのかは第1号の1を読んで頂ければお分かり頂ける筈である。

今回の小論はかくして綴られたものではあるが上掲の紀要の結論部, 5に於いて, 「今回のこの小論に於いては紙幅制限上途中迄の序論部分のまとめ迄しか書けなかった。本論文に当る ‘Beatus uir suffert temptationem quoniam...ah ha wendeð efterward to

weole ⁊ to ecche blisse.’(94 : 20-99 : 18), つまり外的誘惑 (Uttre temptatiun) の本論部分のまとめは論ずる事が出来なかった。改めて次の機会に廻して筆を執り度い」と書いた。そこで本論文は論述上上記の題目で作成してみたものである。

2.

下記テキストの94 : 20-99 : 18は外的誘惑 (Uttre temptatiun or fondunge) の説教の中核部を形成している。そこで説かれている説教の趣意は, つまり我々がこの世間で受ける苦しみは喜んで堪えて甘受しなさい。それは将来天国に昇る為の神が差し向けた使者みたいなもので, あなた方をより幸せにし, 神に受け入れられ易くし, 磨き, より立派にしてくれるものです。そしてそれに耐える為の救済としてはキリストが十字

架で世の為、人の為に苦しまれて死んで行ったあの出来事を思い起こして下さい。キリストは全く自分は悪い事をしていないのに他人の為にそうされた、その事を考えてみて下さい。このような内容、論じ方でこの世の外的、感覚的、肉体的苦しみに対しその処し方、把握方を分かり易く卑近な日常的出来事と知識、体験を引用し、原理的には聖書に現れる予言者の言葉にその根拠を求め、それを原典、拉典語で語った後に殆ど翻案と言えるパラフレーズを行って自分の説教を聞き手に対しては分かり易い日常の言葉で様々なケースを取り上げて繰り返し説いている。処でその説教の仕方とか修辞法（レトリック）、その文章構成法、表現、語彙等、スピーチ（パロール）の外形、形式的面を以下に具体的に要約してみたい。説教のこの本論文はテキストの中では94：20-97：5迄のパッセージと97：6-99：18の2つのグループに分かれていると考えたい。前半のグループの説教に就いての外形的特徴と言うと先ず説教の語り口にみられる繰り返し（repetition）と言えよう。前半部に於けるその繰り返しの構成を更にもっと詳しくみて行くと、初めに、‘Beatus uir qui suffert temptationem…quam repromisit deus diligentibus se.’とラ典語の原典の引用で始まる。その意味は作者、説教者により‘Eadi is 7 seli. 7e haueð i temptati un polemodnesse.’と翻案、その次にはその理由が説かれる‘for hwen ha is ipruet…7e godd haueð bihaten his leoue icorene. Hwen ha is ipruet hit seið. wel is hit iseid.’この翻案は極めて最少限の言葉を有効に使用しての翻案であり、聞き手にとって殆ど理解し難い翻案となっている。従って作者は‘for hwen ha is ipruet hit seið…hit seið. wel is hit iseid.’とその理由を添えているのは適切であろう。然しそれでも尚この比喩的説教の表現は十分説明したとは言えない。そこで説教者は更にその解説として解く文章が‘for alsua prueð godd his leoue icorene :as 7e goltsmið fondeð 7 gold i 7e fure. 7 false gold forwurðeð 7rin. 7 gode kimeð ut brihtre.’である。この説教の箇所での最大の説明すべき要点は‘for hwen ha is ipruet’の処であり、その表現、比喩の真意なのである。それは初めには‘ha schal beon icrunet mid te crune of lif 7e godd haueð bihaten his leoue icorene.’と解説しているが、この比喩表現は‘hwen ha is ipruet’よりは説明としては説得力を持ち聞き手にとっては説教者の真意を推し量るには適切な表現と言えよう。それでも未だその比喩の度合いは高く、より具体的、分析的説得は必要と思われる。そこで説教の言葉は次の様に展開される。‘Secnesse is a brune hat forte polien. ah…se he

brihteð hire swiðere. to beo martris euening 7urh a hwilinde wa.’ (94：30-95：12)、そこでの説教の言葉を更に細かく分析してみると、ポイントは初めの言葉、‘Secnesse is a brune hat forte polien. ah na 7ing ne clenseð gold as hit deð 7e sawle.’の表現による説教文であるがこれは依然として聞き手にとって分かりにくい。説教は次の様に展開される。‘Secnesse 7 godd send nawt 7 sum lecheð…Eueneð to martir 7ene polemode.’つまり病気は人間が医師を通して治すものではありません。病気には次の様に6つの効用があるのです。と言った趣旨の説教が説かれるが、この部分の説教は具体的に経験的にみてもこの程度の比喩としては聞き手にとって分かりにくい内容では13世紀初めとしてはないと考えられよう。かくして説教は‘Secnesse’に就いてその効用が更に分析される。‘7us is secnesse sawlene heale. Salue of hire wunden. …to beo martirs euening 7urh a hwilinde wa.’ここで作者は病気を世間の常識に全く反する意味で扱っている事が説教者の説教の特徴であり、その説教理論の要点である。それが聞き手にとってどれ程分かり易く説得力を持っているか否かが説教者の説得力であろう。つまり説教者は始めに‘7us is secnesse sawlene heale. Salue of hire wunden.’と要約し、更に‘Scheld 7 ha ne kecche ma :as godd sið 7 ha schulde 7ef secnesse hit ne lette.’としての効用、‘Secnesse makeð mon to understonden …to cnawen him seoluen.’‘ant as god meister beat forte…is 7e worldes blisse.’そして最後に‘Secnesse is 7i goldsmið 7e …to beo martirs euening 7urh a hwilinde wa.’と言った具合に病気のもたらす人間の魂への効用を比喩的に説く事によって悪による誘惑に耐える者のその恵みを説いて聞かせる。この説教の中でも‘Secnesse is 7i goldsmið 7e ipe blisse of heouene ouerguldeð 7i crune. …to beo martirs euening 7urh a hwilinde wa.’の表現は病気を鍛冶工に喩えた上で病気が重たくかつ長引けばそれはそれだけ鍛冶工がより忙しく、金を長い時間に亘って鍛え作ると同じ事なのです、と説いている。悪魔によるこの世に出合う誘惑に耐える者の姿の有つ意味はかくして重病人が喩えられ、その説明文として鍛冶工が金を鍛える喩えによって説明、その具体的効用は‘Secnesse 7 godd send …deð 7eose six 7inges.’として‘Wescheð 7e sunnen 7e…Eueneð to martir 7ene polemode.’の説教の中で説かれている。従って病気は世間の常識とは全く正反対に‘7us is secnesse sawlene heale. Salue of hire wunden.’とか‘Scheld 7 ha ne kecche ma…7ef secnesse hit ne lette.’とかであってその効果は

‘Secnesse makeð mon to understonden…hu frakel is þe worldes blisse.’の表現の中で語り尽くされている。

この説教の直後に為される次の説教はその進展の中にあつて1つの段落を構成するグループ、1つのまとまった説教内容の層を形成していると思われる。その原文は‘Nalde me tellen him alre monne dusegest þe on helle weari treo aa. on ecnesse?’…þ her is seliliche mei ha seggen.’ (95: 14–23)の部分で、この様な誘惑に耐える事の持つ意味合い、価値、評価、その事は何であるか、の説教をする段落である。その始めは‘Nalde me tellen him alre monne dusegest þe forseke a buffet for a speres wunde?’…on helle weari treo aa. on ecnesse?’つまりより更に大なる苦しみ、災難、不幸を避ける為により更に小さい、少ない、軽いそれらを甘受する事を勧め説く。ここでは‘Nalde me tellen him …’と言う表現を使っているが、更にその次には「この世間の人々はこう言ってはいませんか」と言う説教内容の普遍性を示す表現を更に高められ、‘Godd hit wat leoue sustren al þe wa of þis world is ieuenet to helle …þ her is seliliche mei ha seggen.’、この世にあつて苦しみに、誘惑に耐える事の意味合い (significance) の喩えの表現、語り口はその直前の‘þe forseke a buffet’…on helle weari treo aa. on ecnesse?’よりは遙かに比喩度を高め、つまり説得力をより持つ表現となっている。’ON oðer half leornið moniualde frouren aßein…þe kimeð of monnes uuel. …Ne wurðe nan se wod þ he todeale þe þing þe godd haueð iueiet’ (97: 5) 迄は説教の内容からみて1団のセンス・グループを成していよう。その中を説教の進展に沿って分析して行くと、上述に於ける‘Secnesse’の喩えの論理、論法はこの段落に於いては、初めに説かれる様に‘ON oðer half leornið moniualde frouren aßein þe uttre fondunge þe kimeð of monnes uuel.’ (95: 23–4)と把えている。その根拠として、‘for þeos þe ich habbe iseid of is of godes sonde.’と言う。この根拠付けは後々の説教に於いてその基盤となっている。‘Hwa se eauer mis seið þe oðer misdeð þe…æ ti ruhe of aunne.’の解析、分析は前述の鍛冶工の冶金の喩えに相似している。‘for he fret him seoluen…æ brihteð þi sawle.’の解説文によって一層説得力を有つものになっている。’ON oðer wise þenche hwa se eauer hearmed þe. oðer…grome. teone ‘he is godes gærde.’の説教もそれと同じレベル、同じ意図を以て発せられ、ここでもその補足説明として‘for swa he seið þurh sein iuhanes muð i þe apocalipse. Ego quos amo arguo æ castigo.’と言って、その根拠付けとしてヨハ

ネの黙示録の言葉を引用している。その拉典語原文は説教者によってパラフレーズ又は翻案される。‘Ne beat he nan bute hwam se…ah nawt ne leote he wel of þ is godes gærde.’その言葉は同様に、‘for as þe feader hwen…warpeð þe gærde i þe fur.’と補足説明が書かれ、更に‘for ha nis noht namare.’と飽くまで相手、聞き手の了解を徹底的に求める。説教者は同じ趣旨、同じ型の相似した文章表現と型を用いて、更にその正当性を説く、‘alswa þe feder of heouene hwen…in to þe fur of helle.’そしてその根拠として次の様に説教をしている。‘for þi he seið ellesher. Michi uindictam ego retribuam.’ここの説教に於いては加害者を‘þe feder of heouene’と言って正にその説教の根拠にしようとしている。その最終的、客観的根拠は拉典語原文、‘Michi uindictam ego retribuam.’である。その意味は‘þ is. min is þe wrake. ich chulle gælden. as þah…gef þe feader hat hit ‘hit cusseð þe gærde.’の説教文で詳しく、具体的に説かれている。その説教の趣旨は、あなたを叩く人は天国の父なのである。だから不平など言うてはいけません。その父の与える奉仕の鞭に対し口づけをなさい、と説く。その根拠として、‘for swa hat ower feader. þ…æ calumpniantibus uos.’の拉典語の原文が示され、その内容の要旨が説教者の分かり易い翻案で以て説かれる。‘þis is godes heste þ…þe he haueð ow wið ip orschen.’の説教文がそれに当たる。この様に‘luuieð ower uamen he seið æ doð god gef ge mahen to þeo þ ow weorið. …þ ow eni eil doð oðer misseggeð.’つまり敵を愛する事を最終的にはこの段落では説いているのだが、説教者はその締め括りとして最後に行なう説教は‘Nu seið operhile sum. …þ he todeale þe þing þe godd haueð iueiet’私が愛するのは彼らの魂 (Sawle) をであつて決して体 (bodi) ではありません。それらは一体を成している。つまり一つのものであつて、それを分けて二つにすべきではありません。その根拠として説教者は‘Quod deus coniunxit homo non sepatet.’の拉典語を引用し、それは直ちに翻案され、‘Ne wurðe nan se wod þ he todeale þe þing þe godd haueð iueiet’と表現している。

以上でもってこの段落の説明は一応終る。次にそれに続いて為される説教、その段落は意味のまとまりから97: 6–99: 18とみる。此処では説教者はこの世の苦しみ、それに耐える事はやがて天国に於ける至福を得る事に繋がつて、と説く。その説教の語り口、方法、言葉遣い、論理的構成、展開の仕方等に触れ乍らまとめてみたい。その説教は97: 6から98: 1とその

残り、終り迄の2つにテキスト中で区分される。先ず初めに ‘Pēncheð ȝet þisses weis. þ…ȝ tilleð hise teares. for þi frourið ow seoluen. letabitur iustus cum uiderit uindictam.’ の説教で始まる。子供が悪事をして、それを叱り、子供は悟り、やがてその事を忘れて平常の気持ちに帰る。この日常の出来事をラ典語文 ‘letabitur iustus cum uiderit uindictam.’ を引用してこれから始める説教の前提としている。そしてその次には、 ‘Godd schal o domesdei don as pah he seide…ȝ al þ ȝe þolieð al is for ow seoluen.’ の長い説教が続く。人々が加害者に対して為す反撃を戒める説教を引き続き為しているこの段階に於いて、その内容、論理は前段落とは別の論法を以て為される。イエス・キリストが十字架の上で苦しんで死んで行った場面の事を思い出して、他者からの加害に対しては耐える事を説いている。ここでは聞き手の娘達を想定して ‘Dohter hurte þes þe.’ と言っている。彼女らが加害者に仕返しをした場合、主にこれを如何に戒めるかその苦痛に耐える事を教えている。イエスは ‘Godd schal o domesdei don as pah he seide.’ 主はまるで言葉でしゃべるかの様にその運命、宿命の日に於いて為されるであろう、と切り出して、 ‘Dohter hurte þes þe…loke he seið hu he hit schal abuggen.’ この前の説教が日常生活上に見られる分かり易い比喩を打ち出している説得であったのに比べ、ここではその比喩にたとえられる根拠として提言されている文章表現と考えられよう。 ‘loke dohter loke he seið hu he hit schal abuggen.’ の文章表現がその切り出し文であり、それは ‘Ant þer ȝe schule seon…þ wa bið him þes líues.’ と一層具体的に分析される。更にその文章表現の分析が一層進んでその文章に何んな意味合いを持つか、その説教文は更にそれに続いて語られる文章、 ‘ȝe schulen beo wel ipaiet þrof. for ower wil ȝ godes wil schal swa beon iueiet : þ ȝe schulen wullen al þ he eauer wule. ȝ he al þ ȝe wulleð.’ が正に説教に於いて最も根幹となる説明文として表現されている。この説教の段落に於ける説教者の説きたい結論は ‘Ouer alle opre þohtes in alle ower passiuns þencheð eauer inwardliche up o godes pinen.’ の説明文に凝縮されている。そこの文章はそれ以下に於いてキリストが十字架上で受けた苦しみの様がかなり具合的にリアルに語られる。その説教文を持つ意味合いは ‘loke dohter loke he seið hu…þ wa bið him þes líues.’ を内容的に具体的、分析的表現を以て説得する事によって聞き手の説教文の内容理解を一層促進、援助する働きを持っている。 ‘loke dohter loke he seið hu he hit schal

abuggen. Ant…þ wa bið him þes líues.’ と言ってイエスの十字架上での苦しみの様を具体的に説いてから、 ‘turneð þruppr þer ich spec. hu…to þ tet he þ olede.’ と言って説得した後にその結果次の様なことになります、と言う、つまり ‘ant ȝe schulen lihtliche iseon hu…ȝ þ he droh al þis nawt for him seoluen.’ と説教している。この説教でより効果的な言葉の働きをしている文章は ‘nomeliche ȝef ȝe þ encheð þ…ȝ þ he droh al þis nawt for him seoluen.’ の説教文であり、その文章に対し説教者はその直後に、 ‘for he ne agulte neauer. ȝef…ȝ al þ ȝe þolien. al is for ow seoluen.’ と述べて如何に聞き手が受けた苦しみがイエスの受けた苦しみと比べて小さく、ただそれだけでなく、聞き手のそれが自分からのいわば自業自得的、責任は全て自分達の側にあるのに対し、イエスの受けた苦しみはその苦しみの度合いもさる事乍ら全く謂れ無き受難であり、全ての点に於いて聞き手のそれとは比べようも無く質、程度共に自己犠牲的、身代りの行為であったかを説得的手法で分かり易く、具体的に事細かく説き論すと言った内容の説教文となっている。以上で97:6から始まる段落の説教の前半部に就いての分析はひと先ず了えて次にその後半部、98:2-99:18の説教文の分析に入って行きたい。

この段落での説教の趣旨はこの世にあって苦しみに耐える事が天国に在って幸せに日々を送る前提となる事である。その真実性に就いて説いている。 ‘Gað nu þenne gleadluker bi…toward te wearitreo ȝ te deað of helle.’ この比喩的表現で始まり、続いて同じく比喩的説教文、 ‘Betere is ga sec to heouene…þen to wa wið eise.’ が繰り返される文章表現としては何れも説教文としてはそれぞれその機能を持つてはいるが後者の方が比喩度は高く又説得力、効果共に勝つていよう。その根拠としてソロモンの言葉を引用、 ‘Salomon. Via impiorum complantata est lapidibus. id est. duris afflictionibus.’ とそれに続く同じ趣旨での説教文は次の表現を用いて繰り返し説かれる。 ‘Nawt for þi witerliche. wrecche wortliche men buggeð deorre helle þen…ȝe hit nalden sullen for al þe world of golde.’ その根拠として ‘For þ schal beon ower song…annis quibus uidimus mala.’ を引用し、その翻案として、 ‘þ is. wel is us for þe dahes þ…þ we weren seke ín. ȝ sehen sar ȝ sorhe.’ ‘Betere is ga sec to heouene þen hal to helle. to murh ðe wið meoseise : þen to wa wið eise.’ と上述の説教で説いたその修辭法は此処の説教文で再度使われている。

後半部に於いて、ここまではこの世に在ってその苦

しみを受けてそれに耐える事の方を勧める説教はソロモンの言ったラ典語原文を根拠に進められている。説教者はこれ以後の説教ではその苦しみを神の恵み、命令、‘godes sonde.’と表現している。以後この段落の終り迄はそれを主題にしてこの世に在って苦しみを甘受する事を勧める説教文となっている。先ず初めに‘Euch wortlich wa hit is godes sonde.’と定義づけをする。それ故に人々はその方を迎え入れなければいけないことを説く。‘Heh monnes messenger me schal hehliche underuon ⁊…þe ne com neauer from him að et his liues ende.’ ‘godes sonde.’であるが故に受け入れよ、と説くこの説教文では‘nomeliche ȝef he is priue wið his lauere.’並にその説教文を更に説明する意味での‘⁊ hwa wes mare priue wið þe king of heouene hwile…þe ne com neauer from him að et his liues ende.’の2つの説教文がその根拠として語られる。この‘Heh monnes mesager’をそう言う訳で人々は当然受け入れるべき者として説得される。然らば、肝腎のその伝言者の伝言内容は何なのか、‘þes messenger hwet teleð he ow…þ ha is cwite of þ þing þ ich am of schadewe.’がその内容を示している。‘he froureð ow o þis wise.’と切り出して、‘Godd as he luuede me:…hit is halwende.’それ故に神はあなた方を愛している事になります。ものは一切神からの賜物である場合、その影をも外的苦しみを以って感じないものはありませんから、‘Nere þ þing gríslích hwas…wið uter hurt felen?’ ‘hwet walde ȝe seggen bi…þ ha is cwite of þ þing þ ich am of schadewe.’の説教文はその内容を修辭的又は寓意的表現で以って聞き手に分かり易く説いた語り口を成している。その説教の語り口は、‘wite ȝe to soðe þ…of þe wa of helle.’この説教文は説教目的の最終的結論として示され、‘Ich am þe schadewe seið þes messenger. þ is worldes weane.’自分をその正に影として表現しておいてから、‘nedlunge ȝe moten oðer…þ ich am of schadewe.’にも拘らずあなたは私を受け入れなければいけないのです。‘Hwa se underueð me gleadliche ⁊…ich am of schadewe.’何んとなれば、私を喜んで受け入れる人は私がその影である処の正にそのものに対して生きているからなのです。その根拠として聖ジェイムズの言葉を引用してその真実である事の根拠としている。‘þus spekeð godes messenger. for þi seið iame. Omne gaudium existimate fratrescum in temptationes uarias incideritis.’このラ典語原文は説教者の翻案によって次の様にその内容の要旨が語られる。‘Alle blisse haldeð hit to fallen…þe uttre beoð

iháten.’リテラリーな翻訳ではないが要旨を十分汲み取った簡潔な英語である。そして中でも視点は勿論‘to fallen i misliche of þeose fondunges’にあるから、その処は、‘þe uttre beoð iháten. ant seinte pawel. Omnis disciplina in presenti uidetur esse non gaudíi : set meroris. postmodum uero fructum ⁊ cetera.’この世に在っての全ての試練とみえるもの一切は喜びではなく苦しみであるが後にはそれらは真に喜びとなろう。この意味の原文は説教者によって次の様に翻案される。‘Alle þe ilke fondunges þe…ah ha wendeð efterward to weole ⁊ to eche blisse.’ラ典語原文に沿った十分その意味を取り組んでの名訳と言えようか。

3.

上記の論考は作品のプロットを土台にしてそのスピーチ（パロール）を通して作者の説教文を進行の過程の中で、主題を何の様に説教の論理の中で位置づけをし、かつそれを相手に分かり易く如何に説き伏せているかをその言語表現を基準、基礎にしつつ読みを通してその論理を意味的構造の形で把握、説教の意味的構造をまとめてみようを試みた試論である。説教のスピーチ又はパロール、言を通して、なるべく説教のものと形を留めようとして論じた場合、体系性及共時的特性の記述が出来にくい。そこでこの第3のセクションでは上述のテキストの範囲内に於いてそう言った側面を多少とも眺めてみようとした。又それは同様に上述のまとめの意味も或る程度は持っていよう。然し筆者の今回の試論の意図は2に於いて論じられた形での分析を目指して書かれたものである。

上述の説教文の一般的、原則的構造的特徴は他の説教部分にも殆どそのまま当てはまる。然し此处では上述の説教文を用いてのなるべくこの範囲に於いて構造的特徴を以って論じてみたい。

説教は一つの説教主題に関して比喩又寓意的に語られるのが最も基本的表現法である。今回扱った小論の説教部分は外的誘惑を耐える事を解いた説教文である。その内容の基礎的根拠は冒頭に語られる‘Beatus uir qui…quam repromisit deus diligentibus se.’の原典であり、その内容の説教がそれ以下の全ての説教で説かれている。比喩と言っても説教は全部比喩から成り立っているとしても間違いではないと言えるので比喩の度合いが抑々問題となるのだが、此处では試論でもあるし、深いアカデミックなリサーチの積りで考えていないので典型的なケースを取り上げてその比喩の内容と説教趣旨との相関関係を比較的説教の筋立てを

考慮し乍ら読者に分かり易い形式で以って述べてみたい。

‘Eadi is ⁊ seli. þe haueð i polemodnesse…wel is hit iseid.’ は上述原文の翻案又解説的翻訳であるがここでは ‘quo niam cum probatus’ の原文が特に重要である事から ‘for alsua pruuēð godd his leoue icorene.’ 以下で ‘for alsua pruuēð godd his leoue icorene : as þe goltsmið fondeð þ…þ gode kimeð ut brihtre.’ の直喩の表現によってその意味を説く。次の ‘Secnesse is a brune hat forte þolien. ah…as hit deð þe sawle.’ の寓意的説明文は誘惑の苦しみを人の病の患者に見立てての説教文で、そこでは ‘ah na þing neclenseð gold as hit deð þe sawle.’ が鍛冶工が銅を錬金させる喩えと相関させての説得的表現を採っている。以下 ‘Secnesse þe godd send nawt þ sum lecheð þurh…Eueneð to martir þene polemode.’ は病気が、喩えとしての ‘Secnesse’ が人間の心に対するその働きを箇条書きの形で分かり易くまとめている。‘þus is secnesse sawlene heale. Salue of hire wunden.…gef secnesse hit ne lette.’ はそれらをまとめて病が人の魂に対して言わば医者への働き、治療をむしろ行なう、つまり ‘Salue of hire wunden.’ ‘Scheld þ ha ne kecche ma :…gef secnesse hit ne lette.’ としている。その事の真意は次の説教文 ‘Secnesse makeð mon to understonden hwet he is. to cnawen him seoluen.’ で表現されている。それはとりも直さず次の事実を意味していると言う。つまり ‘ant as god meister beat forte…hu frakel is þe worlde blisse.’ かくして ‘Secnesse’ は ‘goldsmið’ であって、彼は天国の祝福の中であなたの金の王冠を鍛え製造するお方と言えよう。‘Secnesse is þi goldsmið þe iþe blisse of heouene ouerguldeð þi crune.’ そしてその病がひどければ又長く続けばその分だけ殉教の度合いが高まるとしている。‘se þe secnesse is mare se…to beo martris euening þurh a hwilinde wa.’ ここでこの世に在って苦しい誘惑に耐えて生き抜く事の真の意味を寓意的に説く説教はひとまず終る。次はその恵み、恩寵は何処に在るのか、それは何の為にそうするのか、耐えて苦しみを克服し乍ら生きて行く事の意味合いを問う。その解答として説教者は次の様に比喩的説教文で答えている。‘whet is mare grace to þeo þe…þ her is seliliche mei ha seggen.’ その説教文の中で、‘Nalde me tellen him alre monne dusegest þe…on helle weari treo aa. on ecnesse?’ の説教がその意味の解答をしている文章と言えよう。此処でもその語り口は見事に隠喩的表現を用いての解説をしていることが分かる。

‘ON oðer half leornieð moniualde frouren aȝein…for þeos þe ich habbe iseid of is of godes sonde.’ 此処では以下の説教文、最終的には長い説教となっているが ‘Ne wurðe nan se wod þ he todeale þe þing þe godd haueð iueiet’ 迄が1つの趣旨の説教意図を持つ一団の意味の固まりと捉えられようか。その長い説教の語り口を比喩的語り口に注目して分析して行く事にしよう。この世の苦しみに耐えて生き抜く事をこの段落では ‘moniualde frouren aȝein þe uttre fondunge þe kimeð of monnes uuel.’ と捉えている。その理由は ‘for þeos þe ich habbe seid of is of godes sonde.’ と解説している。その内容は更に一層寓意的説教文で以って次の様に解説している。‘Hwa se eauer misseid þe oðer misdeð þe…ah he makeð smeðe ⁊ brihteð þi swale.’ 此処での隠喩的分析も又見事なもので、あなたに対し悪態をつく人、害を加える人を神の伝言ではその人はいわば金属の錆をとる鑪の働きをしてきている人と喩え、あなたの罪の錆を取ってくれている者として解する。その結果あなたの魂の磨きは一層研磨されて滑らかになります、と言う。

同じ趣旨の説教で作者は亦次の様にも説教文を繋いで説教を続ける。それは ‘ON oðer wise þenç hwa se eauer hearmed þe…Ego quos amo arguo ⁊ castigo.’ がその要点を示す。上述の説教文では加害者は鑪に喩えられたが、此処ではその人は ‘godes ȝerde.’ 神の鞭に喩えられている。その根拠はヨハネの黙示録を拉典語原文で引用、直ちに英訳する ‘Ne beat he nan bute hwam se he luueð’ 更にその直訳は翻案されて ‘⁊ halt for his dohter. namare þen…for ha nis noht namare!’ と語る。父親が仕方が無い自分の子供が悪い事を為した時に止むなく与える鞭による懲らしめに喩えられる。必要にして最少限の戒めの意味での鞭打ちを加えてその鞭は直ちに火の中へ投げ入れられよう、と解説。その事実は丁度神が仕方がない男女を、彼の愛する子の為と思って鞭打ち、直ちにそれを地獄の火の中へ投げ入れるのと似ていよう。これより普遍性を有たせ、説得力を具えた直喩でその事実の真実性の補強をする。‘alsua þe feder of heouene hwen he haueð ibeaten wið…’ 以下この段落の終る ‘Ne wurðe nan se wod þ he todeale þe þing þe godd haueð iueiet’ の説教は一つの主題に就いての一団の説教文と考えられる。天国の神も同じ様にあなたの為を思っている鞭を与えられる。それ以上の鞭は加えられません。その鞭は火の中へ投げ入れられる。この説教文の根拠は、‘Michi uindictam ego retribuam.’ がそれに当たる。その意味する内容に就いて作者は次の様な説教文で以

って解説する。‘as þah he seiðe. Ne wreoke ge nawt ow seoluen. ne…gef þe feader hat hit :hit cusseð þe ge erde.’ つまりその鞭は天国の神の鞭とすることを説教の基調として設定、‘ah þenched anan þ he is ower feadres gerde. æ þ he wule gelden him gerde seruise.’ その事から鞭打たれた子はその鞭をひたくり取ってそれに口づけする、‘ant nis þet child fulitohen þ scratleð aßein æ bit up o þe gerde?…gef þe feader hat hit :hit cusseð þe gerde.’ この寓意的説教文でこの段落の一連の説教趣旨は全て尽くされたと考ええる。他人の加害行為を天国の神の奉仕として最終的に理解させる、その根拠をヨハネの黙示録に置く、この手堅い説教の後に作者、説教者は更に付け加えて言う。その説教は、‘ant ge don alsua mine leoue sustren. …æ orate pro persequentibus æ calumpniantibus uos.’ の部分がその要点である。ここに於いても ‘for swa hat ower feader. þ…þeo þe he ow wið beateð.’ と言って天国の神の命令としている。そしてその根拠は ‘Diligite í nimícos uestros. … pro persequentibus æ calumpniantibus uos.’ のラ典語原文を引用、そしてこれも神の命令としている。‘Þis is godes heste þ…oðer weredest hearde here.’ ここではその鞭に対して何う打たれた人は対応するかの文章は上述の ‘þet deboneire child hwen hit is ibeaten. gef he feader hat hit :hit cusseð þe gerde.’ の寓意的表現を基礎に全く同じ趣旨の内容を同じ表現手法で以って説き明かしている。然し此处ではその内容が一層詳しくなって ‘þ ge cussen nawd wið muð. ah wið luue of heorte. þeoþe he ow wið beateð.’ その打たれた鞭に対して、口で口づけをするのではなく、心の愛で以ってしなさい。その根拠として上述の ‘Diligite ínimícos uestros. …æ orate pro persequentibus æ calumpniantibus uos.’ を添えている。口づけの仕方に関し更に具体的で説得力ある文章を引用し、その引用文は更にその意味する処が、‘Þis is godes heste þ…biddeð georne for þeo þ ow eni eil doð oðer misseggeð.’ の説教文によって一層明らかにされる。同じ趣旨の内容の説教は更に使徒の言葉で以って説かれる。‘ant te apostle leareð. …as dude ure lauerd seolf æ alle his hali halhen.’ 此处では敵に対する対応は、悪に対して悪で応えるのではなく、悪に対して善で対応する事を諭す。あなたの敵を愛する事、悪に対して悪ではなく善で応える事で以って、鞭に口づけすると言う比喩敵表現の内容が根拠を有って明らかにされる。

次に続く段落の前半部、‘þenched get pisses weis. þ…æ al þ ge þolieð al is for ow seoluen.’ (97 : 6 –

98 : 1) ではこの世の苦しみに耐える事の説教の説得方法は比喩を使っているとは若干言い難いがキリストが十字架上で苦しんだ事をリアルに取り上げて、そしてその直後に ‘Lo her þe healde oþre. lo hu he healeð nu æ helpeð him seoluen. …al þ ge þolieð al is for ow seoluen.’ と言う。此处では自分の苦難をキリストの苦難に喩えてごらんない、‘æ eueneð al ower wa. secesse æ oðerwet. woh of word oðer of werc. æ al þ mon mei þolien :to þ tet he þolede.’ と言ってから尚更に、‘ant ge schulen lihtliche iseon hu…æ al þ ge þolieð al is for ow seoluen.’、そうしたらあなたは明らかに分かるでしょう、と言って、キリストの耐えた苦しみに比べて自分のそれが如何に些細なものか、特にキリストの受難は自分からの責に拠らないで他の人々の受けるべき苦しみを一身に担った。それに比べあなた方のそれは自ら招いた受難であり、その全ての苦しみに耐えてもそれは自分自身の為なのです、より厳しい同じ事例を引き合いに出して、それとの比較による説得、一種の直喩による説得と言えるかもしれない。その説教意図が明瞭にみられる文章は ‘loke dohter loke he seið hu he hit schal abuggen. Ant…ge schulen beo wel ipaet prof. for ower wil æ godes wil schal swa beon iueiet : þ ge schulen wullen al þ he eauer wule. æ he al þ ge wulleð.’ の辺りに伺われよう。

この外的誘惑の最後の段落の前半に対して後半は次の文章で説教は開始される。‘Gað nu þenne gleadluker bi strong wei æ bi swincful toward te muchele feaste of heouene. þer as ower gleade freond ower cume ikepeð.’ (98 : 2 – 99 : 18) この世に在ってその苦しみに耐えてこそ天国に於いて神に受け入れられよう、と言った趣旨の説教の締めくくりの文章となっていよう。今迄説教して来たその内容の理解の上に立っての結論が寓意的表現で以ってまとめられている。‘Gað nu þenne gleadluker bi strong wei æ…þer as ower gleade freond ower crume ikepeð.’ ‘Betere is ga sec to heouene þen…þen to wa wið eise.’ はその典型的説教文と言えよう。そしてこの段落の結論的、締めくくり部分に於いてその理由、根拠として、‘Euch worldlich wa hit is godes sonde.’ と述べている。その解説として比喩的、寓意的説教文が語られる。‘Heh monnes messenger me schal hehliche underuon æ…þe ne com neauer from him aðet his liues ende.’ 高い処に居られる人の使者を高い処で受け取めて、その方を自らの友達とする、特にそのお方が彼の主と親密な間柄にあった場合は、然らばその使者はどんな内容を伝えに來られたのか。その内容は使者が直接人々に語り

かける形をとってそれに続いて長々とその段落の終りまで語られる。‘þes messenger hwet teleð he ow : he froureð ow o þis wise.’ と先ずその説教は始まる。既に全てこの世の苦しみは一切神の命令、掟である、高きに在られるお方の使者を人は受け入れなければいけない。特にその使者が主と親密なお方であれば、と言ったこれ迄の説教を踏まえて、‘Godd as he luuede me : he send me to his leoue freond…Mi cume ⁊ mi wununge þah hit þunche attri : hit is halwende. Nere þ þing grís lich hwas schadewe ge ne mahte nawt wið uter hurt felen?’ この寓意度の高い説教に於いて終りの文章、私の到来と滞在は苦しみかもしれないが、それは喜ぶべき事なのです。と言うのも、この世の如何なる物でも人はその外的被害を受けずしてはその影をすら感じる事は出来ないからではないでしょうか、と人々に彼自身が語る表現となっている。使者は、自分はこの世の苦しみの影ではあるがそれは地獄の影でもある。然しあなた方はにも拘らずこの私を受け入れなければいけないのです。こうして私を喜んで受け入れ、私を友にしてくれる人に対し神はその人は私がその影であるものを有っている人です、と言う。‘hwet waled ge seggen. bi þ eisfule wiht þ…þ ha is cwite of þ þing þ ich am of schadewe.’ その根拠として説教者は聖ジェイムスの言葉 ‘Omne gaudium existimate fratres cum in temptationes uarias incideritis.’ を引用、更に聖パウロの言葉をそれに続け、‘Omnis disciplina in presenti uidetur esse non gaudí : set meroris. postmodum uero fructum ⁊ cetera.’ その直後に ‘Alle þe ilke fondunges þe we beoð nu ibeaten wið : þuncheð wop : nawt wunne. ah ha wendeð efterward to weole ⁊ to eche blisse.’ (99 : 15–18) と翻案し、この外的誘惑 (Uttre temptatiun) の説教を終らせている。

以上作品の第六章、Temptation, Temptatiunの中の外的誘惑の説教の全てはこの様に語られる。説教者の

説教しようとしている内容は何回も言う様にこの世に在って苦しみに耐える事の意味とその価値又意義、目的を説き諭す事である。この小論は始めに述べた様にこの説教者のその言葉を解体、分析して原理化、構造分析化しようとした論じ方でなく、その説教者のスピーチを前提としてそのひたすら最もその言葉表現に密着しての意味の構造的な分析を試みたもの、形式、内容、意図共に試論的性格を以って書かれてある。

説教者の為す説教の話術、語り口、その構造は、今回の全篇に於いて言える事はその説教趣旨、目的に合わせて常に拉典語原典に拠らしめている。従ってその根拠は飽く迄その論拠を以って最終とし、その内容の合理性とか科学性とかには拠っていない。その内容を如何に聞き手にとって分かり易く説き施すか、全て説教者の腕にかかっている。上記拙論では3に於いて修辭法の中に、つまり言語表現の中にそれが現れている事と看做し、専ら語り口、その説教過程と寓意的表現に焦点を合わせて最も形式的意味の構造を明らかにしようとした。今回も原稿の制限枚数の範囲内でこのような研究目的を以って拙論を書いたが予想していた程もっと内容的批判、分析に迄至る事が出来なかった。問題は拉典語原典の内容を説教者がその説教目的に合わせて如何に言語表現化するかである。一般的論理性とか合理性とか科学性とかよりは要点は言語表現、修辭、文章表現、構成を分析研究し、それが必ずしも一般論理性、合理性とか客観性に合える事を要件とはしていない事である。原文の内容が重複・反復を重要な構成要件としている事もあって拙論に於いてもこの傾向は多分にみられる。将来は研究を重ねてもっと整然とした試論を作成したい。然しこれは中々難しい作業であると思う。

使用した作品のテキストは前回同様、The English Text of the Ancrene Riwe. *Ancrene Wisse*, edited from MS. Corpus Christi Colleg Cambridge 402 by J. R. R. Tolkien, Oxford University Press, 1962. である。

Beatus uir qui suffert temptationem

quoniam cum probatus fuerit accipiet coronam uite
quam repro
misit deus diligentibus se. Eadi is ⁊ seli. þe haueð i
temptatiun
polemodnesse. for hwen ha is ipruet hit seið ha schal beon
icrunet mid te crune of lif þe godd haueð bihten his
leoue icorene. Hwen ha is ipruet hit seið. wel is hit iseid.
for als wa prueð godd his leoue icorene. ⁊ as þe goltsmið fon
deð þ gold i þe fure. þ false gold forwurðeð þrin. þ gode kí
með ut brihtre. Secnesse is a brune hat forte polien.

ah na þing
neclenseð gold. ⁊ as hit deð þe sawle. Secnesse þ godd send
nawt þ sum lecheð purh hire ahne dusischipe. deð þeose
six þinges. wescheð þe sunnen þe beoð ear iwahte. wardeð
toȝein þeo þe weren towards. Prueð pacience. Halt in ead

modnesse. Muchleð þe mede. Eueneð to martir þene pole
mode. þus is secnesse sawlene heale. Salue of hire wunden.
Scheld þ ha ne keoche ma. ⁊ as godd sið þ ha schulde ȝef sec
nesse hit ne lette. Secnesse makeð mon to understonden
hwet he is. to enawen him seoluen. ant as god meister beat
forte leorni wel. hu mihti is godd. hu frakel is þe worlðes blisse.
Secnesse is þi goldsmið þe iþe blisse of heouene ouergul
deð þi crune. se þe secnesse is mare se þe goldsmið is bisgre.
⁊ se hit lengre least. se he brihteð hire swiðere. to beo mar
tirs euening purh a hwilinde wa. hwet is mare grace to þeo
þe hefde ofearnat þe pinen of helle world abuten

ende. Nalde me tellen him alre monne dusegest þe
forseke a buffet for a speres wunde ⁊ a nelde pricchunges for an
bihefdunge ⁊ a beatunge for an hongunge on helle weari
treo aa. on ecnesse ⁊ Godd hit wat leoue sustren al þe wa of
þis world is ieueneet to helle alre leaste þine. al nis bute
bal plohe. al nis nawt swa muchel as is alutel deawes
drope. toȝeines þe brade sea ⁊ alle worlðes weattres. þe
mei þenne edstearten þi ilke grisliche wa. þe eateliche pinen
purh secnesse þ agead purh ei uuel þ her is seliliche mei
ha seggen. ON oðer half leornið moniualde frouren
aȝein þe uttre fondunge þe kimeð of monnes uuel. for þeos
þe ich habbe iseid of is of godes sonde. Hwa se eauer mis
seið þe oðer misdeð þe. nim ȝeme ⁊ understond þ he is þi
vile þe lorimers habbeþ. ⁊ fileð al þi rust awei ⁊ ti ruhe
of sunne. for he fret him seoluen weilawe as þe file deð.
ah he makeð smeðe ⁊ brihteð þi sawle. ON oðer wise
pench hwa se eauer hearmed þe. oðer eni wa deð þe. scheo
me. grome. teone. he is godes ȝerde. for swa he seið

(94 : 20—95 : 13)

Þencheð ȝet pisses weis. þ child ȝef hit spurneð o sum
þing oðer hurteð. me beat þ hit hurte on. ⁊ þ child is
wel ipaiet. forȝeteð al his hurt ⁊ stilleð hise teares. for þi
frourið ow seoluen. letabitur iustus cum uiderit uindictam
Godd schal o domesdei don as þah he seide. Dohter hurte
þes þe. dude he þe spurnen i wreaððe oðer in (h)eorde sar. i
scheome oðer in eani teone. loke dohter loke he seið hu he
hit schal abuggen. Ant þe ȝe schule seon bunkin him
wið þes deofles betles þ wa bið him þes líues. ȝe schulen
beo wel ipaiet prof. for ower wil ⁊ godes wil schal swa beon
iuiet. þ ȝe schulen wullen al þ he eauer wule. ⁊ he al þ
ȝe wulleð. Ouer alle opre þohtes in alle ower passíuns

þencheð eauer inwardsliche up o godes pinen. þ te worlðes
wealdent walde for his þrealles polien swucche schendlakes.
hokeres. buffez. Spatlunge. Blindfeallunge. pornene cru
nunge. þ set him i þe heaued swa. ⁊ þe to blodi strundes stri
ken adun ⁊ leaueden dun to þe eorðe. his swete bodi ibun
den naket to þe hearde pilar ⁊ ibeate swa. ⁊ tet deorewurðe
blod ron on euche halue. þ attri drunch þ me him ȝef
þa him þurste o rode. hare heafde sturunge up on him
þa heo on hokerunge gredden se lude. lo her þe healde
opre. lo hu he healeð nu ⁊ helpeð him seoluen. turneð
þurpe þe ich spec. hu he wes ipinet in alle his fif wittes.
⁊ eueneð al ower wa. secnesse ⁊ oðerhwet. woh of word oðer
of werc. ⁊ al þ mon mei polien. to þ tet he polede. ant ȝe
schulen lihtliche iseon hu lutel hit reacheð. nomeliche
ȝef ȝe þencheð þ he wes al ladles ⁊ þ he droh al þis nawt
for him seoluen. for he ne agulte neauer. ȝef ȝe polieð wa.

ȝe habbeð wurse ofseruet. ⁊ al þ ȝe polieð al is for ow seol
Gað nu þenne gleadluker bi strong wei ⁊ bi

uen.
swinful toward te muchele feaste of heouene. þer as
ower gleade freond ower cume ikepeð. þenne dusie worl
des men gað bi grene wei toward te wearitreo ⁊ te deað
of helle. Betere is ga sec to heouene þen hal to helle. to murh
ðe wið meoise. þen to wa wið eise. Salomon. Via
impiorum

complantata est lapidibus. id est. duris afflictionibus. Nawt
for þi
witerliche. wrecche worltliche men buggeð deorre helle þen
ȝe doð þe heouene. a þing to soðe wite ȝe. amís word þet
ȝe polieð. a deies longunge. a secnesse of a stunde. ȝef
me chapede ed ow an of þeos o domesdei. þ is þe mede þe
ariseð þrof. ȝe hit nalden sullen for al þe world of golde. For
þ schal beon ower song biuoren ure laurd. letati sumus
pro diebus

quibus nos humiliasti. annis quibus uidimus mala. þ is.
wel is us
(97 : 6—98 : 19)

purh sein iuhanes. muð i þe apocalipse. Ego quos amo
arguo ⁊ castigo. Ne beat he nan bute hwam se he luueð
⁊ halt for his dohter. namare þen þu waldest beaten a fre
mede child þah hit al gulte. ah nawt ne leote he wel of þ
is godes ȝerde. for as þe feader hwen he haueð inoh ibeaten
his child ⁊ haueð hit ituht wel. warpeð þe ȝerde i þe fur.
for ha nis noht namare. als wa þe feder of heouene hwen
he haueð ibeaten wið an unwreast mon oper an unwrest
wummon his leoue child for his god. he warpeð þe
ȝerde þ is þe unwreste in to þe fur of helle. for þi
he seið elleshwer. Michi uindictam ego retribuam. þ is.
min is þe wrake. ich chulle gelden. as þah he seiðe. Ne wreo
ke ȝe nawt ow seoluen. ne grucchi ȝe ne wearien hwen
me gulteð wið ow. ah þencheð anan þ he is ower feadres
ȝerde. ⁊ þ he wule gelden him ȝerde seruisse. ant nis þet
child fulitohen þ scratleð aȝein ⁊ bit up o þe ȝerde. þet
deboneire child hwen hit is ibeaten. ȝef þe feader hat hit.
hit cusseð þe ȝerde. ant ȝe don als wa mine leoue sustren.
for swa hat ower feader. þ ȝe cussen nawd wið muð. ah wið
luue of heorte. þeo þe he ow wið beateð. Diligite inimicos
uestros. benefacite hiis qui oderunt uos. ⁊ orate pro perse
quentibus

⁊ calumpniantibus uos. Þis is godes heste þ̅ him is muchel
 leoure þen þ̅ tu eote gruttene bred. oðer weredest hearde hé
 re. luuieð ower uamen he seið ⁊ doð god gef ge mahen to
 þeo þ̅ ow weorrið. gef ge elles ne mahen biddeð georne for
 þeo þ̅ ow eni eil doð oðer misseggeð. ant te apostle leareð.
 Ne gelde ge neauer uuel for uuel. ah doð god eauer aȝein
 uuel. as dude ure lauerd seolf ⁊ alle his hali halhen. gef ge
 þus haldeð godes heaste. þenne beo ge his hende child ant
 cusseð þe gerde þe he haueð ow wið iporschen. Nu seið o
 þerhile sum. his sawle oðer hiren ich chulle wel luuien.
 his bodi o nane wise. Ah þ̅ nis nawt to seggen. Þe sawle ⁊
 te licome nis bute a mon. ⁊ ba ham tit a dom. wult tu
 dealen o twa þe godd haueð to an isompnet? he forbeot
 hit ⁊ seið. Quod deus coniunxit homo non separet. Ne
 wurde nan
 se wod þ̅ he todeale þe þing þe godd haueð iueiet

(96 : 1 — 97 : 5)

for þe dahes þ̅ tu lahest us wið oðer monne wohes. ⁊ wel is
 us nu lauerd for þe ilke ȝeres þ̅ we weren seke in. ⁊ sehen sar
 ⁊ sorhe. Euch wortlich wa hit is godes sonde. Heh monnes
 messenger me schal hehliche underuon ⁊ makien him
 glead chére. nomeliche gef he is priue wið his lauerd. ⁊ hwa

wes mare priue wið þe king of heouene hwil he her wunede.
 þen wes þes sondesmon. þ̅ is worldes weane þe ne com nea
 uer from him aȝet his liues ende. þes messenger hwet teleð
 he ow. he froureð ow o þis wise. Godd as he luuede me. he
 send me to his leoue freond. Mi cume ⁊ mi wununge
 þah hit þunche attri. hit is halwende. Nere þ̅ þing gris
 lich hwas schadewe ge ne mahte nawt wið uter hurt felen?
 hwet walde ge seggen bi þ̅ eisfule wiht þ̅ hit of come? wite
 ge to soðe þ̅ al þe wa of þis world nis bute schadewe of þe wa
 of helle. Ich am þe schadewe seið þes messenger. þ̅ is worldes
 weane. nedlunge ge moten oðer underuo me. oðer þ̅ grisli
 che wa þ̅ ich am of schadewe. Hwa se underueð me
 gleadliche
 ⁊ makeð me feier chére. mi lauerd send hire word. þ̅ ha is cwi
 te of þ̅ þing þ̅ ich am of schadewe. Þus spekeð godes messa
 ger. for þi seið seín iame. Omne gaudium existimate fratres
 cum in temptationes uarias incideritis. Alle blisse haldeð hit
 to fallen i misliche of þeose fondunges. þe uttre beoð ihá
 ten. ant seinte pawel. Omnis disciplina in presenti uidetur
 esse
 non gaudí. set meroris. postmodum uero fructum ⁊ cetera.
 Alle þe
 ilke fondunges þe we beoð nu ibeaten wið. þuncheð
 wop. nawt
 wunne. ah ha wendeð efterward to weole ⁊ to eche blisse.

(98 : 20—99 : 18)